19　　やけぼっくい 　　　　　　　　　　　　　助詞⑤　副助詞

ある君達に、忍びて通ふ人やありけむ、いと美しき児さへ出で来にけれＡば、あはれとはⅠ思ひきこえながら、きびしき片つ方やありアけむ、絶え間がちにてあるほどに、思ひも忘れず、いみじう慕ふがうつくしうて、ほど経て立ち寄りたりしかば、いとさびしげにてめづらしくや思ひけむ、かき撫でつつ見ゐたりしを、え立ちとまらぬことありて出づるを、例のいたう慕ふがあはれにおぼえて、しばし立ちとまりて、「さらば、いざよ」とて、かき抱きて出でけるを、いと心苦しげに見送りて、前イなる火取を手まさぐりにして、

　Ⅱこだにかくあくがれ出でＢば薫物のひとりやいとど思ひこがれむ

と忍びやかに言ふを、屛風の後にて聞きて、いみじうあはれにおぼえけれＣば、児もかへして、そのままになむ居ウられにし。

【本文チェック】

①　ア～ウの助動詞の、文法的意味・文中での活用形を〔　〕に書きなさい。

ア〔　　　　　　　・　　　　形〕　イ〔　　　　　・　　　　形〕

ウ〔　　　　　・　　　　形〕

②□Ａ～Ｃの「ば」のうち、用法の異なるものを一つ選び、記号に〇をつけなさい。

Ａ・Ｂ・Ｃ

③傍線部Ⅰ・Ⅱを現代語訳し、右の（　）に書きなさい。

Ⅰ（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

Ⅱ（　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。＊〔数字〕はノート本冊での本文の行数を表す。

１　うつくし〔１〕　①（　　　　　　　）

　　　　　　　　　　②立派だ

２　いとど〔７〕　　（　　　　　　　）

問２　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ。（徒然草）

ア　いかにもふびんな　　イ　ずっと眺めていたい

ウ　しみじみと趣深い　　エ　すっきり晴れやかな

　（　　　）

２　もの思ふ人の魂はげにあくがるるものになむありける。（源氏物語）

ア　（気持ちが）落ち着かない　　イ　（心から）憧れる

ウ　（体から）さまよい出る　　　エ　（体に）悪影響な

（　　　）

【文法力 ✚】

問３　次の傍線部の意味用法として適当なものを、後から選べ。

１　聞きゐたる程に、証人にさへなされて、（徒然草）

２　世の中はむなしきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（万葉集）

３　人の亡きあとばかり悲しきはなし。（徒然草）

４　月のかたぶくまで伏せりて、　（伊勢物語）

５　的のあたりにだに近く寄らず、無辺世界を射給へるに、（大鏡）

ア　例示　　イ　限界　　ウ　強意

エ　添加　　オ　程度　　カ　類推

１（　　　）　　２（　　　）　　３（　　　）

　　　　　　　　　　　　　　 ４（　　　）　　５（　　　）

問４　次の傍線部の説明として適当なものを、後から一つ選べ。

１　はるばるきぬる旅をしぞ思ふ（伊勢物語）

２　祭り見しさまいとめづらかなりき。（徒然草）

３　を軽くし、を重くす。（方丈記）

ア　サ行変格活用動詞「す」の連用形

イ　過去の助動詞「き」の連体形

ウ　副助詞

１（　　　）　　２（　　　）　　３（　　　）

問５　次の傍線部を現代語訳せよ。

１　散りぬともをだに残せ梅の花　（古今集）

（　　　　　　　　　　　　　　）

２　風吹き波激しけれども、さへに落ちかかるやうなるは、（竹取物語）

（　　　　　　　　　　　　　　）

３　などすら、の世のこと夢に見るはいとかなるを、（更級日記）

（　　　　　　　　　　　　　　）

【古典常識】

問６　『堤中納言物語』と同じジャンルの作品を、次から一つ選べ。

ア　『保元物語』　　イ　『今昔物語集』　　ウ　『落窪物語』

エ　『栄花物語』　　オ　『大和物語』

（　　　）

【解答】

【本文チェック】

①　ア＝過去推量・連体　イ＝存在・連体　ウ＝尊敬・連用

②　Ｂ

③　Ⅰ＝思い申し上げるものの　Ⅱ＝子どもまでも（が）

問１　１＝かわいい　２＝いっそう

問２　１＝ウ　２＝ウ

問３　１＝エ　２＝ウ　３＝オ　４＝イ　５＝カ

問４　１＝ウ　２＝イ　３＝ア

問５　１＝せめて香りだけでも残せ　２＝雷までもが

　　　３＝高僧などでさえも

問６　ウ

【現代語訳・参考】

問２　１　季節の移り変わることこそ、何事につけてもしみじみと趣深い。

２　物思いをする人の魂はなるほど（体から）さまよい出るものだったのだ。

問３　１　聞いているうちに、証人にまでもされて、

２　世の中はむなしいものだと知るときにひときわ、いよいよますます悲しいことであるよ。

３　人が死んだ後ほど悲しいものはない。

４　月が（西に）傾くまで伏せっていて、

５　的のそばにさえも近寄らず、でたらめな方向を射なさったので、

問４　１　はるばるやってきた（この）旅を思うことだ。

２　（賀茂の）祭りを見たときの様子は実にめずらしいものであった。

３　金の価値を軽くし、穀物の価値を重くする。

問５　１　散ってしまうとしても、せめて香りだけでも残せ、梅の花よ。

２　風が吹き波が激しいけれど、雷までもが頭の上に落ちかかるようで、

３　高僧などでさえも、前世のことを夢に見るのはたいへん難しいそうだが、

問６　『堤中納言物語』は作り物語。ア『保元物語』は軍記物語、イ『今昔物語集』は説話集、エ『栄花物語』は歴史物語、オ『大和物語』は歌物語。